

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00342

研究課題名(和文) 勅撰三集を中心とした日本古代漢詩文の文献学的研究

研究課題名(英文) A philological study of ancient Japanese Chinese poetry focusing on the three imperial collections

研究代表者

土佐 朋子 (TOSA, TOMOKO)

佛教大学・文学部・教授

研究者番号：00390427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、勅撰三漢詩集を中心とした古代日本漢詩集の文献学的研究に取り組んだ。『懐風藻』については、これまでの調査に基づいて、現存本文のほぼ全てのデータを網羅した『校本懐風藻』にまとめた。現存伝本の原本調査と本文収集を計画していた勅撰三集については、コロナ禍によって計画通りには調査ができなかったが、最初の勅撰漢詩集である『凌雲集』については、45本の現存伝本のうち未紹介伝本も含めて12本の調査と収集を行うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『校本懐風藻』の作成は、わざわざ所蔵地に行かなくても『懐風藻』の本文の情報を一覧することができる。そのため、『懐風藻』の研究や古代日本の漢詩文の研究を進展させることにつながる。研究の進展は、学校教育においては社会において日本漢詩に対する興味関心を喚起し、理解を深めることにつながるという意義がある。勅撰三漢詩集の文献学的研究の成果は、研究が十分とは言えない『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』の本文研究を進めることになるという意義がある。

研究成果の概要(英文)：In this research, I conducted a philological study of ancient Japanese Chinese poetry collections, focusing on the three imperial collections of Japanese Chinese poetry. Regarding 'Kaifuso,' I have compiled it into 'Kohon Kaifuso,' which covers almost all the data of the extant text, based on the research I have done so far. Due to the coronavirus pandemic, I was not able to research as planned for the three imperial collections of Japanese Chinese poetry, which I had planned to research and collect the original texts of the extant manuscripts, but regarding the Ryouunshu, I was able to research and collect 12 books.

研究分野：日本文学

キーワード：懐風藻 勅撰三漢詩集

### 1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初は、奈良朝期から平安初期に成立した日本古代の漢詩文集、すなわち『懐風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』は、本文系統や最善本文が明らかになっておらず、研究に必要な校本が作成されていない状態にあった。

『懐風藻』については、岡田正之氏、山岸徳平氏、大野保氏、小島憲之氏、田村謙治氏、足立尚計氏、沖光正氏らの研究によって確認されていた23本の写本に、土佐朋子が2010年度から2018年度まで科研費の補助を受けて行ってきた本文調査によって15本の写本が新たに追加され、合計38本の現存写本が確認され、また2010年度からの研究において、群書類従懐風藻の本文は、天和四年版本、塩竈本(鹽竈神社蔵)、白雲書庫本(未発見)などの複数の本文が取り込まれて江戸期に新たに成立した複合本文になっており、特定の本文の系統上に位置づけることはできないことが明らかになりつつあった。しかし、披見の機会が得られない写本も残されていたこともあり、38本の現存写本の本文情報を用いた校本は未だ作成されず、昭和32年(1957)刊行の大野保『懐風藻の研究』(三省堂)に掲載された「校異篇」の情報に頼るしかない状態にあった。本文系統についても群書類従本が元来の懐風藻本文から大きく変質した複合本文になってしまっていることが明らかになったにも拘らず、昭和39年(1964)刊行の小島憲之校注『日本古典文学大系69 懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(岩波書店)の「解説」における群書類従本系統と非群書類従本系統に大別する考え方が通説的位置にあり続け、2012年には群書類従本を底本とした辰巳正明氏の注釈書『懐風藻全注釈』(笠間書院)が刊行されることにもなった。このように本課題の研究開始当初は、懐風藻の本文研究の成果が十分に浸透も反映もされないまま、旧来の本文情報のままで研究が行われていた状態にあった。

勅撰三集については、小島憲之氏の『国風暗黒時代の文学』(塙書房、1968~1998年)と『日本古典文学大系69 懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(岩波書店、1964年)の段階に研究がとどまっている状態にあった。『凌雲集』『文華秀麗集』は、それぞれ和泉書院から1991年(本間洋一氏編)と1985年(芳賀紀雄氏編)に索引が刊行され、研究者にとって利便性は高まったが、本文の情報に関しては小島憲之氏の研究を更新したものとは言えない。また、『凌雲集』の本文研究には、澤田總清「凌雲集校勘」(『國學院雑誌』46巻5号、1940年5月)、渋谷玲子「凌雲集札記」(『斯文』32号、1961年12月)、世良亮一『凌雲集詳釈』(自費出版、1966年)、翠川文子『凌雲集』の写本について(『川村短期大学研究紀要』9号、1989年3月)もあり、継続されてきてはいるが、それらの成果が広く共有され、研究に十分に活用されているとは言い難い状態にあった。最新の翠川氏の研究も更新されないまま顧みられることもほとんどない状態に置かれていた。

このようなことから、本研究開始当初においては、日本古代漢詩文の研究の進展のために、懐風藻は校本を作成してこれまでの研究の成果を活かして全ての本文情報を一覧にして公開し、勅撰三漢詩集については、小島憲之氏ら先学の成果を改めて振り返り、校本作成を目的とした諸本研究が行われなければならない状態にあったと言える。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、『懐風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』の本文系統や最善本文を明らかにして、かつ現存伝本の本文情報を一覧にした校本を作成し、日本古代の漢詩文の研究を進展させることである。『懐風藻』は同時代の『古事記』や『万葉集』に比して研究が遅れている。『凌雲集』を初めとする勅撰三漢詩集も勅撰和歌集『古今集』編纂を考える上で無視できない位置にあると思われるが、勅撰三漢詩集として一括りにして論じられることが多く、個々の詩集および漢詩の本文や表現に関する基礎的な研究は進展しているとは言い難く、和歌や物語などの研究に比べて遅れている。この遅れは、校本がないために本文の考証や最善本文の確定が困難であり、作品研究をするにも常に本文がこれよりよいのかという問題が払拭できず、個別具体的な表現の研究になかなか着手しにくいことが原因の一つだと思われる。その原因を解消するために、本研究では、『懐風藻』はこれまでの研究を発展的に継続し、同時に勅撰三漢詩集の校本作成を目指した基礎的な研究に着手することにした。

### 3. 研究の方法

研究の方法は、次の通りである。

- ①伝本の所蔵機関に赴いて、原本を調査し、書誌的なデータをとると同時に、複写や撮影などによって本文を収集する。
- ②収集した本文を整理して、異同を確認する。
- ③それらの異同を一覧にして、それぞれの本文の性格や写本同士の関係を見出す。
- ④それぞれの写本の書写者、所蔵者など、成立と伝来に関わった人物について調査する。
- ⑤江戸期の詞華集に引用された本文も収集して、各写本と同様に整理する。

⑥これらの作業を繰り返し、本文の情報を蓄積することによって、本文系統や最善本文を見出し、全ての本文情報を一覧できるよう校本にまとめる。

#### 4. 研究成果

(1)『懐風藻』については、次の①～⑥の成果を得た。

①2017年5月から2018年10月にかけて連載してきた「懐風藻校本1～4」を土台として、2021年2月に『校本懐風藻』（新典社）を刊行した。「諸本解題」と「校本」の2部構成とし、「諸本解題」の部には、底本とした榊原忠次旧蔵本（天理大学天理図書館蔵）、対校本とした34本の写本、未見の写本（飯田瑞穂氏蔵本、山本読書室本）と未発見の白雲書庫本と対校本には入れなかった蟹江本（蓬左文庫蔵）、および版本三種と群書類従本、さらに懐風藻詩を収録する主な江戸期詞華集と版本書入、鈴木真年『懐風藻箋註』以来の主たる注釈書について、解題を付した。「校本」の部では、本文異同を一覧にし、江戸期版本への書入や注釈書などについても必要に応じて参考資料として記載した。

②『校本懐風藻』刊行段階では未見であった「杏菴堀先生真筆」の墨書を有する山本読書室本の調査を行うことができた。その結果、読書室本は宝永二年版本をもとにして堀杏庵書写本を装って書写された写本である可能性が高いことが分かった。頭注や文字の脱落、誤写も少なからず確認され、「懐風藻目録」もないことから、宝永二年版本の忠実な転写本とは言えない。懐風藻の正文であるはずの人物伝が細注形式で書されることや、「懐風藻序」が「懐風藻叙」と書されることや、康永元年書写奥書が元奥書であることを知らずに堀杏庵の号「正意」を書していることなども考えあわせると、懐風藻をよく知らない人物による書写と推測される。「正意」の下には「アヤウナバカガキヲシヨツタアホウ エラヒアホウジヤ」、裏見返し左下の署名らしき墨書「祖仁」の右に「コエ（エカ）名ハナイゾナイズナイゾ」という謎の朱書が確認される。蔵書印は、正方形陽刻陰刻を組み合わせた朱印「是島」、正方形陽刻朱印「月句之裏華浮吟中」、長方形陰刻朱印「淵黙雷声」、長方形陽刻朱印「莫弄物喪志」の四種が確認できるが、誰の蔵書印なのか今のところ不明である。この成果は「山本読書室蔵『懐風藻』写本の性格—『杏菴堀先生真筆』の真偽をめぐって—」（『近世京都』5号、2022年5月）に発表した。

③群書類従懐風藻の末尾に記載される亡名氏「歎老詩」が、元来の懐風藻詩ではなく後世に書き加えられたものである可能性は、詩の表現の観点から、山岸徳平氏や小島憲之氏によって既に指摘されていた。本研究では、まず、諸本の本文の状況からも、この詩は懐風藻成立時から収載されていたものではなく、元禄17年に白雲書庫本において創作され書き加えられた可能性が高いと言えることを指摘した。白雲書庫本は天和4年版本の欠落箇所独自に創作した本文を書き加えて書写された写本であり、この詩も書き加えられた本文の一つだということである。それが屋代弘賢校本に書入の形で書き取られ、屋代弘賢校本を用いて編集した群書類従本において正文に採用され、群書類従懐風藻の本文の一部を構成することになったと推察される。また、現在は第四句に脱落句を持つ五言十二句の詩として受け取られているが、白雲書庫本に書き加えられた時には五言一〇句とその第二句「春日不須消」に対する異文「伶俚須自怜」一句で構成されていた可能性が高い。それを屋代弘賢が書き取る時に恣意的に「伶俚須自怜」を第二句に据えた五言十一句という中途半端な形に変形したため、日本詩紀において第四句に欠落句を想定して五言十二句の詩として収録されることになり、それが現在まで引き継がれてきたと見られる。さらに、元禄期にこの詩が創作され白雲書庫本に書き入れられた背景には、当時の寒山詩ブームと、拈華微笑の悟道精神を梅花に重ね合わせる七言絶句「悟道詩／探春詩」の浸透があり、創作過程の第一段階では、「春日不須消」を第二句に置き、梅を拈る自分に「少年」を見て喜ぶ老人を描く四句がまず創作され、第二段階において第二句の異文「伶俚須自怜」が創られると同時に、第五句目以降の後半六句が増補され、漢詩の伝統的な主題「歎老」を寒山詩風に描く世界に創り変えられた可能性を指摘した。この成果は、「群書類従懐風藻の後代竄入詩—亡名氏『歎老詩』考—」（『京都語文』27号、2019年11月）、『「尋春不見春」詩偈流伝考—増殖する『探春詩／悟道詩』—」（『文学部論集』104号、2020年3月）に発表した。

④『懐風藻』の大友皇子伝、大津皇子伝、葛野王伝の三つの人物伝について、本文研究の成果を活かして最善本文を見出し、それぞれの解釈を行った。人物伝は、『日本書紀』で歴史を知る世代の一人である懐風藻撰者自身が、『日本書紀』を相対化する視点から独自に形成した自らの歴史観に基づいて書かれたものであり、漢詩をこよなく愛する懐風藻撰者はその人物が遺した漢詩こそがその人物を復元する第1次資料だと考え、漢詩を通した人物造形が行われていると推察される。具体的には次の通りである。

④—1、「大友皇子伝」

『日本書紀』においては天智天皇時代の皇太子は一貫して大海人皇子だという認識が示されるのに対して、『懐風藻』では皇太子は大友皇子であり、大海人皇子は大友皇子から皇位を篡奪した悪党だという認識が示される。『日本書紀』では大友皇子は太政大臣にはなっているが、皇太子になったという記事はない。懐風藻撰者は、太政大臣就任前、太政大臣時代、皇太子時代の時系列を立て、『日本書紀』の記事を受命の皇子にふさわしいエピソードに創り変え、堯の試用に対して資質を示し後継者として認められた舜の如く、「太政大臣」から「皇太子」になったという独自の歴史を組み立て、賓客によって教育されて漢詩を創作する理想の皇太子として造形されたと考えられる。懐風藻撰者が大友皇子が皇太子になったと確信したのは、『日本書紀』の

記事をそのように解釈したのと同時に、大友皇子の「述懐」に自身を皇太子の立場に置いた表現があることに拠ると推察される。この成果は、『懐風藻』大友皇子伝の思想—漢詩を創る『皇太子』—（『京都語文』29号、2021年11月）に発表した。

#### ④—2、「大津皇子伝」

硬派な知識人である一方で、皇位を奪おうとした第三子として大津皇子を造形すると同時に、「詩賦の興り」でもあったこの知識人の早世を同じ知識人の立場で悼む『日本書紀』に対し、『懐風藻』大津皇子伝では、本来ならば謀反など起こす必要もなかった長子である大津皇子が、自らの自由奔放で放蕩な性格ゆえに行心の接近を許し、その誤った占断によって天命を遂げることができなかった永遠の「潜竜」として造形していると考えられる。『日本書紀』にはない武力にも秀でた放蕩な性格の皇子という人物像は、身分秩序に拘泥しない仲間意識が表出された大津皇子の「春苑言宴」や「遊獵」から導き出されたものだろう。この大津皇子伝の大津皇子像は「懐風藻序文」および後人聯句とも共通性が見いだされるため、「後人」は懐風藻撰者その人だと考えられる。さらに、この『懐風藻』『日本書紀』の大津皇子像に対して、『万葉集』では、秩序や常識よりも自らの欲望を優先する自由奔放、大胆不敵な性格で、そのために命を落とすことになったという点は『懐風藻』との共通性を含みながら、他者とりわけ女性の心を掴んだ皇子として描かれる点に特徴がある。この成果は、『日本書紀』大津皇子伝の意図—『詩賦之興、自大津始也』の意味—（『日本文学研究ジャーナル』14号、古典ライブラリー、2020年6月）、「性頗る放蕩にして法度に拘らず—『懐風藻』大津皇子伝前半部における人物造形—」（『京都語文』28号、2020年11月）、「太子の骨法これ人臣の相にあらず—『懐風藻』大津皇子伝後半部における行心の『誣誤』—」（『文学部論集』105号、2021年3月）、「有間皇子と大津皇子—『日本書紀』と『万葉集』における造形の相違—」（『文学部論集』107号、2023年3月）に発表した。

#### ④—3、「葛野王伝」

葛野王伝については、従来、時の天皇であった持統天皇を「皇太后」と呼称していることが疑問視されてきたが、これは皇帝崩御後に禁中で次の皇帝擁立を先導する後漢の歴代「皇太后」に重ね合わせた造形であると推察される。ここに、葛野王こそが正統な皇位継承者であるにも拘らず、「皇太后」持統天皇によってその立場を奪われたのだという懐風藻撰者の歴史観が示されていると考えられる。この成果は、『懐風藻』葛野王伝の論理と意図—『皇太后』に奪われた皇位—（『早稲田大学日本古典籍研究所年報』15号、2022年3月）に発表した。

⑤肖奈行文「秋日於長王宅宴新羅客詩」について、懐風藻本文研究の成果に基づけば行文の氏族名は従来の「背名」ではなく「肖奈」とすべきであり、この詩には母国を喪失して異国の日本で再生する肖奈氏の覚悟が、同じく母国に帰還することなく異国の匈奴で生きた李陵に重ね合わせて詠出されていると考えられる。作者の氏族名については、1991年に佐伯有清氏によって「背奈」ではなく「肖奈」とすべきことが論証されており、新大系『続日本紀』（岩波書店）ではそれに基づいて「肖奈」が採用されているにも拘らず、懐風藻の研究においては最新の『懐風藻全注釈』（2012年）でも「背奈」のままになっているなど、佐伯氏の研究成果が反映されないままであった。本研究では、懐風藻の現存伝本の状況からも、佐伯氏の「肖奈」であるべきだという論は追認できることを確認し、氏族名が「肖奈」であれば、これまで不明とされてきた「幸用李陵弓」は故国喪失者としての覚悟の表出であると読み取れることを論じた。この成果は、『幸用せん李陵の弓』—肖奈行文の覚悟—（『早稲田大学日本古典籍研究所年報』16号、2023年10月）に発表した。

⑥下毛野虫麻呂「秋日於長王宅宴新羅客詩」の第三・四句「況乃梯山客 垂毛亦比肩」について、「垂毛」は竜馬の肢体を、「比肩」は比肩獣をそれぞれ指しており、ともに『芸文類聚』瑞祥部に記され、『延喜式』にも大瑞として掲げられる瑞獣にあたることを指摘した。この新羅使送別詩は、日本に一千年に一度と言われる七百年続く聖代が出現した奇跡に呼応して、新羅使によって瑞獣がもたらされたことと詠むことによって、天皇と新羅使の双方を讃美することを意図したと考えられる。この成果は、『垂毛亦比肩』考—『懐風藻』下毛野虫麻呂『秋日於長王宅宴新羅客詩』と祥瑞—（『京都語文』31号、2024年2月）に発表した。

② 勅撰三漢詩集については、本研究においてまずは所蔵地での原本調査と本文収集とを行う必要があったが、コロナ禍により十分な調査は不可能であった。可能な範囲での原本調査を実施すると同時に、国文学研究資料館のマイクロフィルムによる調査を行い、十分とは言えないが下のような成果を得た。

#### ①関西大学図書館長沢文庫蔵『凌雲集』『文華秀麗集』

『凌雲集』は屋代弘賢旧蔵書であることが分かる。他本との校合書入が上欄や右傍左傍に施されている点は、屋代弘賢校本『懐風藻』と同じであるが、『懐風藻』ほど多くの書入はない。また、『懐風藻』のように巻末に対校本の奥書が書き取られているということもない。『文華秀麗集』には、「原本曾我部苞卿所蔵／宝暦十二年壬午閏四月既望謄写／使宍公人大江資衡」という書写奥書がある。この2本はいずれも国書データベースに登録されているが、紹介はされたことがない写本である。

#### ②早稲田大学蔵の教林文庫旧蔵『凌雲集』

教林文庫については、平成13年度～平成15年度科研費補助金基盤研究C研究成果報告書『教林文庫』の研究（研究代表者：吉原浩人氏 課題番号：13610050）に悉皆調査の報告がある。それによれば教林文庫は、1680年頃から1710年頃に巖寛・覚深という学僧が中心となって収集された比叡山の横川鶏頭院・鶏足院の蔵書を中核としているとされる。この教林文庫『凌雲集』

は、巻末に「一校畢 右一冊於洛下松見林翁之学僧借求之命于松順書写之拭老眸遂一校畢法孫愛護之勿紛失之耳 貞享丁卯窮冬朔三更燈下法印大僧都覚深記之」と朱書されており、貞享4年(1687)、松下見林の学僧が借用を求めてきたので、松順に書写させ、覚深が一校を終えたという事情が窺われる。この写本は、まだ紹介されたことがないが、他の写本と比較対照するとかなり古形の本文を伝えているのではないかと見込まれる。

③ 静嘉堂文庫蔵『凌雲集』写本4本

天明4年(1784)書写本、大田南畝旧蔵の篠崎維章書写本、色川三中(1801~1855)旧蔵の松井簡治文庫本、文華秀麗集と経国集と合冊になった本朝文叢所収写本の4本である。いずれも小島氏や翠川氏に紹介された写本である。群書類従本凌雲集の巻末に「右以弘文院本及大田覃本校正了」という識語がある。大田南畝本と群書類従本の本文を比較対照すると一致度が高く、翠川氏が示唆したように、この大田南畝旧蔵本が群書類従本の編纂に用いられた「大田覃本」と見てよいと思われる。本文は多和文庫に蔵される篠崎維章本とほぼ一致する。また、国会図書館鶯軒文庫蔵の寛保三年(1743)環山人写本の本文ともかなり一致度が高い。

④ 国立公文書館内閣文庫蔵『凌雲集』写本3本

紅葉山文庫本、「弘文学士院」を持つ昌平坂本、和学講談所本の3本である。紅葉山文庫本は本文が空白になっている箇所が少なからず確認される。3本とも小島氏や翠川氏に紹介された写本である。

⑤ 宮内庁書陵部蔵『凌雲集』写本

「鷹司蔵書記」の印を持つ。「以蓮華王院宝蔵之本書写之一見之処字等或脱落或誤失多々仍任管見粗注之猶有疑者欠之俟後論」の書写奥書から蓮華王院に収蔵されていた写本を祖本とすることが窺われる。小島氏や翠川氏に紹介された写本である。

⑥ 岡山大学附属図書館池田家文庫蔵『凌雲集』写本

安永二年(1773)七月に岡山藩士土肥経平が書写したものである。巻末に「安永二年七月下浣写之 富山々人」の書写奥書がある。池田家文庫には土肥経平旧蔵書が「土肥秘函」としてまとまって所蔵されており、その中の1本である。小島氏や翠川氏に紹介された写本である。

⑦ 架蔵『凌雲集』写本

古書店にて購入した架蔵の写本である。蔵書印はない。「雑言奉和」と合冊になっている。凌雲集巻末に「御府本跋曰」として⑤の書写奥書が細字で書き取られており、その後に記された「奉和春日遊獵日暮宿江頭亭子 御製」には細字で「按御府本無此一首当是岑守作而在曉興詩後」と書されている。「雑言奉和」の冒頭に細字で「按御府本無此以下詩」と書されている。

⑧ その他、蓬左文庫蔵『経国集』、都立中央図書館蔵『文華秀麗集』『経国集』についても原本の調査を行い、書誌データと本文の収集を行った。また、国文学研究資料館のマイクロフィルムにより三手文庫『凌雲集』、多和文庫『凌雲集』の写本の複写を取り寄せて、他本との比較対照を行った。しかし、朱書が写っていない箇所が少なからず確認され、十分な調査はできていない。今後、改めて原本の調査を行う予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 土佐朋子	4. 巻 31
2. 論文標題 「垂毛亦比肩」考 『懐風藻』下毛野虫麻呂「秋日於長王宅宴新羅客詩」と祥瑞	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『京都語文』	6. 最初と最後の頁 153-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 土佐朋子	4. 巻 16
2. 論文標題 「幸用せん李陵の弓」 肖奈行文の覚悟	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『早稲田大学日本古典籍研究所年報』	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 土佐朋子	4. 巻 107
2. 論文標題 有間皇子と天津皇子 『日本書紀』と『万葉集』における造形の相違	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『文学部論集』	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 土佐朋子	4. 巻 5
2. 論文標題 山本読書室蔵『懐風藻』写本の性格 「杏菴堀先生真筆」の真偽をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『近世京都』	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 土佐朋子	4. 巻 15
2. 論文標題 『懐風藻』葛野王伝の論理と意図 「皇太后」に奪われた皇位	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『早稲田大学日本古典籍研究所年報』	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土佐朋子	4. 巻 29
2. 論文標題 『懐風藻』大友皇子伝の思想 漢詩を創る「皇太子」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『京都語文』	6. 最初と最後の頁 67-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土佐朋子	4. 巻 105
2. 論文標題 「太子の骨法これ人臣の相にあらず 『懐風藻』大津皇子伝後半部における行心の『かい誤』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『文学部論集』	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土佐朋子	4. 巻 14
2. 論文標題 「『日本書紀』大津皇子伝の意図 『詞賦之興、自大津始也』」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日本文学研究ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 32-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土佐朋子	4. 巻 28
2. 論文標題 「性頗る放蕩にして法度に拘らず 『懐風藻』 大津皇子伝前半部における人物造形 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『京都語文』	6. 最初と最後の頁 103-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土佐朋子	4. 巻 27
2. 論文標題 群書類従懐風藻の後代竊入詩 亡名氏「歎老詩」考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『京都語文』	6. 最初と最後の頁 137 154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土佐朋子	4. 巻 104
2. 論文標題 「尋春不見春」詩偈流伝考 増殖する「探春詩 / 悟道詩」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『文学部論集』	6. 最初と最後の頁 39 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 土佐朋子
2. 発表標題 肖奈行文「秋日於長王宅宴新羅客詩」の論
3. 学会等名 第74回萬葉学会全国大会
4. 発表年 2021年～2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 土佐朋子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新典社	5. 総ページ数 452
3. 書名 『校本懐風藻』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------